

草庵 教 仁 庵

第218号
(発行日)

2008年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と
12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

尊い身であるとは

けるのである。お念仏
のまことを証明するの
はこの煩惱深き身であ
る。

いのちは〈尊い〉というより
〈不思議〉という感覚ではな
かるうか。

最近、よく「人間のいのち

は尊い」といわれる。そうか

もしれない。しかし、それを

自分の上で〈私のいのちを尊

いと感じているか〉と自問自

答してみる。

そうすると、尊いと感じる

どころか罪深き身、宿業深き

身と感じざるをえない。我が

身が尊いとはとても思えない

のである。

の通りで、私たちの意識はい

つでも自分の〈楽〉を求めて

いる。他者を楽にする楽では

なくて、まず自分の楽である。

自己中心的な楽を求め続けて

いる。心身ともに〈楽〉を求

めて満足しようとしている。

楽になればそれをさらに貪愛

し、苦がやってくる嫌悪す

る。愛憎の煩惱はこの身にま

つわりついているのである。

もし、我が身を尊いという

ことがいえるとすれば、それ

は、この身は宿業深き身であ

るけれども、阿弥陀仏が働き

たもう身である。阿弥陀仏の

働き場所はこの身において外

にはない。阿弥陀仏の大悲が

かかっている身である。

しかも、阿弥陀仏は私だけ

に働いてくださるのではない

い。一切衆生において、万人

の身において、働きたもう。

そして、この宿業の身にお

いてこそ「大悲無倦常照我身」

(大悲、うむことなくつねに

我が身を照らしたもう)で、

仏法を有難く聞かせていただ

さらにいえば、人間の身に

生まれたことは有難いことで

ある。人間の身心であればこ

そ阿弥陀仏を知ることができ

るのであるう。もし馬とか猫

の心であれば、阿弥陀仏を知

ることは難しいのではなかる

うか。

このように、人間の身に生

まれたればこそ、仏におあい

できる。そういう点からも、

人間のいのちは尊いといえる

のであろう。

ただ、一般によく〈人間の

いのちは尊い〉といわれるの

は、生命の不思議さから尊い

といっているのではなかるう

か。

連綿と続いてきた大自然の

いのちの歴史といとなみはた

しかに驚異的である。人間の

身体も大自然の生命のいとな

みという一面がある。それゆ

え非常に不思議なものであ

る。それは人間だけではない。

万物のいのちが不思議であ

る。

だから、実感よりいえば、

むしろ、この身において、

自らの宿業の深さを感じ、罪

深い身と知らされる。

そうすると、他を責めるよ

りも、他者の罪を許すゆとり

が出てくるように思われる。

そして、業の深さは自身の

上だけでいべきものである

が、日頃の生活では、他者の

上にも業も感じてしまうこと

がある。

しかし、他の人に向かって

「あんたは業が深い」とはい

えない。なぜなら自分が実

業が深いからである。

そして何よりも大事なこと

は我も人もともに阿弥陀仏の

広大な大悲のかかっている身

である。大悲大悲の阿弥陀仏

のともにましまさぬ人は、一

人もいない。阿弥陀仏は一人

一人を(一人子)の如くに愛

しておられる、と聞く。

だから、他者を粗末には扱

えぬのである。

ただ私は阿弥陀仏のともに

いたもう認識が薄いゆえ、他

者を粗末に扱ってしまう。お

はずかしいことである。(了)

『大智度論』に(識は常に
楽を求む)とある。まさにそ

である。

しかも、老体になると、楽

しみは減少し、苦しみの方が

が多くなる。老病死の苦しみ

というも、老体において顕著

である。

『大智度論』に(識は常に

楽を求む)とある。まさにそ

である。

しかも、老体になると、楽

しみは減少し、苦しみの方が

が多くなる。老病死の苦しみ

というも、老体において顕著

である。

『大智度論』に(識は常に

楽を求む)とある。まさにそ

である。

しかも、老体になると、楽

しみは減少し、苦しみの方が

が多くなる。老病死の苦しみ

というも、老体において顕著

である。

『大智度論』に(識は常に

楽を求む)とある。まさにそ

である。

しかも、老体になると、楽

しみは減少し、苦しみの方が

が多くなる。老病死の苦しみ

というも、老体において顕著

である。

『大智度論』に(識は常に

楽を求む)とある。まさにそ

である。

正信偈に学ぶ問答

(七七)

法蔵菩薩因位時

在世自在王仏所

親見諸仏浄土因

国土人天之善悪

建立無上殊勝願

超発希有大弘誓

(正信偈書き下し)

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を親見して、無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。

*

A 「法蔵菩薩は一切衆生を救おうと、五劫に思惟して、四十八願を起し、この願を成就するために永き修行をされ、本願を実現して今、法蔵菩薩は阿弥陀仏となって、願の通りに働き続けておられる、と無量寿経に積尊はお説きくださいました。その場合、法蔵菩薩は一切衆生を自己の如くに感知する境地におられ、そのゆえに一切衆生を大悲したもうとお聞きしまし

た。そのところをもう少しお聞かせ下さい」

D 「法蔵菩薩は本、仏である。お方が菩薩にくだって一切衆生を救おうと発願された方であって、これから仏の悟りを求める迷いの衆生としての菩薩ではありません。そこで法蔵菩薩は自他一如の悟りの智慧から衆生を見るとき、一切衆生を自己の如くにみそなわされたのでありましょう」

A 「法蔵菩薩は他なる衆生を自己の内容として共感されたのですね」

D 「ええ、そうです。衆生の迷いを自己のものにされ、衆生の苦しみを自己の苦しみの如く感じ、衆生の嘆きを自己の中に内感されたのでありましょう。その共感から一切衆生の安楽と悟りの完成を願われ、一切衆生に代わって修行を行われたとお聞きしています」

A 「衆生を自己の如くに感じる境地におられるのですね」

D 「ええ、一切衆生を己のごとくに感じるといふのは、一切衆生の全体を自己の如くにと

うより、衆生の一一人一人を自己の如くに感じ

る境地におられる、それを宗祖は「一子地」とおっしゃっています。一人一人の生ける者を自己自身と感じる、そういう智慧が法蔵菩薩の智慧でありましょう」

A 「「一子地」といふのは」

D 「親が一人子を愛するような境地のことです」

A 「一切衆生それぞれをあたかも一人子の如くに大悲し、仏にしよう助けようと願いたれ、修行されたのですね」

D 「そうお聞きしています。ですから、法蔵菩薩は衆生の数だけましますともいえましよう。一人一人を自己のごとくに大悲共感したもう法蔵菩薩がまします。これを同体の大悲と申します」

A 「私たち一人一人と体を同じくしてくださいる大悲が法蔵様の大悲ですね」

D 「私たちの迷いの苦しみに、不安に共感し、大いなる安らぎを与えたいと大悲してくださいる、そういう法蔵菩薩が一

人一人の宿業の身を引き受けて、願を發し、行をなされ、南無阿弥陀仏とご自身を現したもう、とうかがいます。月は万人を照らしつつ、一つ一つの小さな草の露に現れ宿る月影のように、法蔵菩薩は一人一人を担い、願行を成就されるのでありましょう」

A 「金子大栄師がよく

わづかなる 庭の小草の白露を もとめてやどる 秋の夜の月

という歌を例に出しておられるのは、その意味ですね」

D 「ええそうですね。一切を包むだけでは無限者の徳（アミダ）とはいえませんが。無限の徳とは、一々の有限を包むとともに一々の有限に無限自身を現す徳用あればこそ、真の無限なのでありましょう。それで宗祖は阿弥陀仏を「真無量」と仰せくださっています。『安心決定鈔』にも

面々衆生の機ごとに、願行成就せしとき、仏は正覚を成じ、凡夫は往生せしなりとあります。面々の機すなわち一人一人の者ごとに法蔵菩薩が願を發し、行を為して下さって、一人一人の浄土往生の功德を仕上げて下さったと

仰せられています」

A 「そうすると、今のこの私を、一人子を愛するようになら来法蔵様はかかりきつてくださっているのですね。有難いことです」

(了)

《秋季彼岸会》

9月22日(日)
午後2時始まり

*帰敬式・午後4時半より

*帰敬式(おかみそり)をご希望の方は前もって申し込んでください。

《盂蘭盆会法要》

8月10日(日)
午後2時始まり
念佛寺にて

*8月22日の「同朋の会」は休みます。

誹法・闡提、回すればみな往く

『仏説無量寿經』の第十八願文に

「たとい我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲して、乃至十念せん。もし生まれざれば正覺を取らじ」と誓われ、その後「ただ五逆と誹謗正法とを除く」(唯除五逆・誹謗正法)という文が続いている。

この「ただ五逆と誹謗正法とを除く」は(唯除の文)といわれ、その現代語訳は、「ただし、五逆の罪を犯し、正しい法を誇るものだけは除かれる」となるであろう。

第十八願は「信ぜよ、わが名を称えるばかりで助ける」の誓いであり、「念仏申すものをば浄土に生まれさせる」という誓いを信ぜよ、との勧めである。

ところが「わが名を称えるばかりで助ける」の仰せを聞いても、そのお心をいつまでもいただかず、阿弥陀仏の撰

取不捨の利益にあずかることがなかなかできないのである。

それはなぜかというところ、「わが名を称えるばかりで助ける」とまで仰せ下さらねば助からぬほどの自分であることがわからぬからである。「まるまる助ける」の念仏の仰せがかかっているにもかかわらず、まるまる助けてもらわねばならない身、全面的に引き受けてもらわねばならぬほどの我が身であることが知れぬから、「わが名を称えよ」にこもる大慈大悲のお心が知れない。知れないから大悲は我が身に届かない。

まるまる助けてもらわねばならないような身であるとは、救われがたき身であること、助からぬ身であること、出離の縁なき身、地獄一定の身であること。それが知れないから、本願の絶大な大悲心が感じられないのである。

だから、第十八願文の終わ

りに、「ただ五逆と誹謗正法とを除く」と仰せられるのは、私たちが自分の身の程がしれず、まだ何とかすれば助かるような身であるがごとくに思う、そういう邪見・慢の私

たちが仏法を誹謗し否定して、いつも五逆の可能性のなかにいる存在であること、いわば「助からぬ身」であることとを知らしめたまう仰せなのである。

そういう仏のみ言葉、それが「ただ五逆と誹謗正法とを除く」である。

仏法を聞いていただけなのは、仏法の責任ではない。仏法を否定するような根性の私の責任である。

仏法を否定するような存在が私である。にもかかわらず、そんな私であるとはつゆとも知らず、自分の罪の深いことを知らず、はなはだ愚かなこととを知らず、邪見・慢で心がたかぶっていることを知らない。だからいつまでたっても、

ないで、今日まで迷いに迷って今ここにいたのである。ではどうしたら、正法を否定せずに仏法を信じていることができるのか。それについて聖人は『浄土文類聚鈔』に「誹法・闡提回すればみな往く」と仰せ下さっている。誹法も闡提も「回すれば」みな浄土に往生することができるのである。では、「回すれば」とはどのようなことなのであろうか。それは回心懺悔のことであろう。いわば、自分の誹法の罪、闡提の罪、いわば仏法を軽んじ、仏法を否定し、仏法に逆らっており、如来に刃を向け、如来のご恩をけとばしている、そういう(罪を罪と知る)ことである。

ずも届くのである。弥陀の本願は「助からぬ者を助ける」本願なのである。

助からぬ身であり、助かる力のない者でありながら、自らははからいで助かろうとするから、「助からぬものを助ける本願」の思し召しが聞こえないのである。

それゆえ、第十八願に「ただ五逆と誹謗正法とを除く」の文がついているのは、われら衆生に、われらの身のほど、助からぬ身のほど、反仏法の身であることを知らしめたまう大悲のみ言葉である。

お助けに除かれるほどの身に、「わが名を称えよ」との仰せがかかっているのである。助からぬ身がお助けのお目あての機であると知らされるのである。

(了)



唐人笠 1
(C)SHOGAKUKAN
INC.

信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》六
太字は松並さんの言葉。

*

○岐阜のおせき同行。

おせき同行は香樹院師の御育てを蒙ったお同行であります。

真夏の事としてはだか「オコシ」一枚。門の左側に井戸がある。手桶に水をくんで、母屋へ行く途中。香樹院師突然おせき同行宅へ立ちよりなされた。師は「おせき後生は如何か」と後ろから声をかけられた。声を聞けば香樹院師と知った。おせき同行は向こうをむいたまま「はい、このままでございます南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」。

我々でしたら香樹院師と知ったら失礼と思つて、ふりかえつて返事をするでしょう。向こうむいたまま（お尻をむけたまま）返事をなされたそうなの。「法」と「法」の対話。ふり向いたら「このままにならぬ」。姿、形をそのままでなければ「このままにならぬ」。こんな処に妙好人とあがめられる尊さがにじみ出ているでないでしょうか。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

（この香樹院師とおせき同行のお話について、小生に故佐々木蓮磨師が、「後

生はいかがか」と尋ねられておせきが「はい、このままでございます」と、自分の胸に相談せずに返事をした、その態度を称讃されたのであると、お話し下さつたのを思い出すが、松並氏の領解と共に有難いご教示であつた。）

○弥陀をたのむとは

南無阿弥陀仏のお助けの世話をせぬことでもあります。

（阿弥陀様のお世話だけでは不足に思ふのか、すぐ我が心の世話をしようとする。）

○弥陀をたのむとは

南無阿弥陀仏のお助けの御手柄の邪魔をせぬことでもあります。

（仏のお手柄ばかりなのに、そのお手柄に我が手柄を加えようとする。）

○弥陀をたのむとは

自分の計らいをさしはさまぬことです。

（私の往生は阿弥陀仏の智慧ばかりですのに、自分の小さな考えをさしはさんで納得しようとする。）

○弥陀をたのむとは

仏様の「念（オモイ）」を「仰せ」通りに御随い申し上げることであります。

（今度の往生は、阿弥陀様の念いにしたがるばかりなのです。）

○弥陀をたのむとは

仏様の仰せ通りにさせてあげることであります。

（この度の往生は、阿弥陀様の念いを通してあげることなのです。させてあげる、の言葉は大胆に聞こえるが、それほど仏との関係が濃密。）

○阿弥陀如来のその昔、法蔵比丘たりし時、我等衆生の往生の業をさだめ玉う時、布施、持戒、忍辱、精進等のもろもろのわずらわしき行を選び捨てて、称名念仏の一行をもつて本願とし玉えり。念仏の行者往生せずば「我も正覚取らじ」と誓ひ玉いて、その願満足して「十劫このかたなり、何ぞ衆生の往生疑わんや」と。

助けて下さる仏様が、お前の往生疑いないと、間違いないと「信」じてござつたら、それでよいでしょう。それがこの口にい出ます、現れて下さる南無阿弥陀仏であります。南無阿弥陀仏

（至心信樂欲生の信樂は、阿弥陀様が私の往生間違いなしと信じ切つてくださっているまこと。如来様の信樂のまことが南無阿弥陀仏とこの口に現れたもう。如来様の信心が衆生の心に反映

する。）

○念仏は後生の用意に、称えるのでない。後生の用意の出来上がった、仕上げの姿、成就の音が、南無阿弥陀仏と「聞」いて、南無阿弥陀仏と念仏するのや。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と、聞えて来るのや。それぞれ南無阿弥陀仏。

（私の往生は阿弥陀仏が仕上げてくださいましたことを知らずに、長い間自分をなんとかしようとかばかりかかっておりました。如来様のご恩ということを知りませんでした。仕上げてくださったことをお知らせ下さる南無阿弥陀仏。）

○南無阿弥陀仏 この声を聞いていると、

（お前に相談なしに、お前の南無阿弥陀仏に成つたぞや。いやでもあろうが、この度はこの弥陀にめんじて、助けさせてくれよ）

と、阿弥陀様が、両手を仕えて、頭を下げて頼んで御座る御姿、御声が、今この口に現れ給う南無阿弥陀仏であります。そうすれば念仏するとか、せねばならぬと言う事に離れて、唯、南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏と聞くばかり。南無阿弥陀仏

（阿弥陀様が頭をさげて、助けさせてくれよと、私の方に頼んでおられる姿

が今の口に聞こえる南無阿弥陀仏と
は、有難いというもおろか。

(了)